

地方都市における若者参画のまちづくりの提案 —宇都宮市を事例に（その3）—

事業代表者 宇都宮大学教育学部・教授・陣内雄次

構成員 宇都宮市経済部産業政策課・佐藤大地

1. 事業の目的・意義

平成26年度事業では、県内高校生へのアンケート調査、岩手県奥州市の子どもの居場所づくり事業のヒアリング調査などを行い、宇都宮市における若者参画のまちづくりの可能性について検証した。今年度は、以上の実績をベースに、近年活性化への新たな取り組みが進みつつある宇都宮市大谷地区をメインフィールドに、宇都宮市中心市街地と協働するネットワーク型まちづくり、観光振興という観点から、若者のまちづくり参画を提案することを目指した。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) 大谷地区、宇都宮市中心市街地のフィールド調査

大谷地区、宇都宮市中心市街地のフィールド調査を、本学教育学部学生（総合人間形成課程）の協力の下実施した。以下がそれぞれの調査と結果の概要である。

1) 大谷地区 「観光地としての大谷とは」

- ・実施時期 2015年11月17日
- ・実施場所 宇都宮市大谷地区
- ・実施者 教育学部総合人間形成課程2年生2名



写真-1 大谷地区のカフェ

2) 宇都宮市中心市街地 「河川環境を活かすには」

- ・実施時期 2015年11月7日

- ・実施場所 宇都宮市中心市街地の田川、釜川の沿

線及び周辺エリア

- ・実施者 教育学部総合人間形成課程2・3年生

9名 及び 社会人サポーター



写真-2 田川沿いの調査

(2) 若者のまちづくり参画に関するワークショップ

- ・実施時期 2016年1月18日
- ・実施場所 宇都宮大学教育学部8A36教室
- ・参加者 上記調査の参加者及びNPO法人職員



など

写真-3 ワークショップの様子

3. 事業の進捗状況

(1) フィールド調査からの知見

1) 大谷地区 「観光地としての大谷とは」

① J R宇都宮駅からのアクセスについて

調査者は、大谷地区へ向かう手段として宇都宮市役所が企画した「大谷観光一日乗車券」を、J R宇都宮駅直近に立地するバスの定期券センターで購入した。この乗車券は地元バス会社が運行する路線バス〈JR 宇都宮駅～大谷（立岩）間〉であれば一日乗り降り自由という乗車券であり、お得であるとしても使い勝手がよい。しかし、バスの定期券センターの立地場所が分かりづらく、観光客にとっては使いづらいということが指摘された。



写真-4 一日乗車券

いくら秀逸な企画をしても、使いづらい、分かりづらいモノやサービスは来訪者にとっては不親切でしかない。中心街と大谷地区をネットワークするという観点から、宇都宮市が抱える根本的な大きな問題を象徴していると言えよう。

②大谷地区の周遊環境

調査者からは、歩行環境に関する厳しい指摘があった。主な指摘は以下のとおりである。

- ・交通量が多いにもかかわらず歩道と車道の分離ができておらず、危険である。
 - ・せっかく大谷地区の観光スポット同士が近く歩いていける距離なのだからもっと歩道を広くすべき。
 - ・道路沿いにある大谷石の花壇の手入れがされて
- いない。

③大谷地区の観光スポット

調査者からは、千手観音など魅力的な観光資源が豊富であるという感想があった。課題は、これら観光資源を周遊できるような環境づくりであろう。

【調査者からの提案】

大谷石を使ったおしゃれな雑貨屋さん

カフェ付近は寂れており寂しい印象を受ける。なので、大谷石を使った雑貨屋さんを近くに造り、若者の観光客を増やすことにつなげる。外観ももちろんカフェのように大谷石を使った建物にし、雑貨は例えばコースターやフォトスタンド、植物を入れる鉢などを取り扱う。

2) 宇都宮中心市街地 「河川環境を活かすには」

フィールド調査に参加した学生からは、田川、釜川の河川環境と景観の素晴らしさに関するポジティブな感想が多々あった。また、この河川環境を中心街の魅力としてもっと活かすべき、という強い意見もあった。一方、大谷地区とのネットワークについては、大谷地区を知らない学生もいるなど、ネットワーク型まちづくりの難しさが改めて認識された。

(2) ワークショップからの知見

ワークショップでは、上記と重複するが、中心街と大谷地区のネットワーク型まちづくりの難しさが指摘された。ただし、大谷地区そのものは学生など若者にとっても訪ねたい魅力ある地域であるということが明らかになったので、大谷の魅力の発信、

中心街からのアクセスの改善、大谷地区の周遊環境の充実などを丁寧に行えば、一定の時間を必要とするであろうが、相互交流の芽はあると推察できた。

4. 事業の成果

今年度の調査とワークショップにより、大谷地区は学生など若者にとっても魅力ある地域であることが分かった。また、宇都宮中心街には河川景

観などまだまだ十分にまちづくりに活かされていない、若者が素敵だと感じる貴重な資源があることも明らかになった。今後は、これらの資源の活かし方を若者目線で検討していくことが必要であろう。

5. 今後の展望

大谷地区では空き家、空き店舗が目立つようになりつつある。これらを負の資産とするのではなく、今回調査者が訪問したカフェのように、若者がリノベーションして活用していく方策を検討していく必要がある。今後は、若者が活躍し住み続けられる環境づくりという視点からの分析・提案が望まれる。